勇者よ、カジノ王になってしまうとは情けない

倉田シンジ
挿絵／かん奈

立ち読み版

あとみっく文庫

アリスティア＝ラス＝ベールセン

ベールセン王国の国営カジノを取り仕切る、才能豊かなお姫様。

ジル

勇者としての素質を認められ、魔王の復活に備えて旅をしている青年。

登場人物紹介

PROFILES

ソフィー

ジルとは同国の出身で、パーティーメンバーとしてついてきた少女。

ラウラ＝ラス＝ベールセン

ベールセン王国の君主。カジノのことは娘に任せている。

勇者よ、カジノ王になってしまうとは情けない

C H A R A C T E R

――ルーレットの玉が足りなかったり、カードやサイコロがボロボロで買い換えなきゃいけなかったり、細かい不備は多いけれど。
「というわけで、ま、まあ、総じて順調ですよ。うん」
強がりもいいところだったけれど、悔しいのでつい誇張してしまった。
もちろん、そんなことはお姫様にはお見通しだったらしく。
「負けず嫌いなのねー。そういうの嫌いじゃないけど、実力が伴ってないとギャンブルにおいてはデメリットの方が大きいのよ？　そんなだから、わたしとの勝負でもなにも考えずぽんぽん負けちゃうのよ」
「ぐぐぐっ……」
王女様とはいえ、年下のくせにジルのことを完全にザコ扱いだ。
「それに比べて、あのソフィーさんはいいわね。即戦力よ？」
「あ……そういえば。ソフィーのやつはどうしてますか？」
環境の変化に忙殺されて忘れていた……というほどでもないけれど、ソフィーはいったいどうしているのだろう。あっちの豪華カジノで働いてるはずだけれど……。
「まずはカジノホールの給仕として働いてもらってるわ。物覚えがよくて理解力もあるから、ディーラーとして働いてもらおうと思って勉強してもらってるところ」
「え⁉　もうディーラーにですか⁉」

そのうちディーラーにしたい、なんて以前も言ってはいたけれど、もうそんな勉強を始めているのか。なんでもそつなくこなすソフィーが評価されるのは理解できるけれど、務まるんだろうか……いや、彼女なら軽くこなしてしまいそうな気もするが。

ただ、ギャンブル自体を毛嫌いしているふしがあるので、あんまりイメージに合わない気がするのだけれど。

「うーん、心配だな……」

「そんなことないわよ？　少なくとも言われた仕事はきっちりこなしてくれるもの。礼儀正しいし、華があるし、ディーラーとして不足はないわね」

ソフィーが褒められるのは付き合いの長いジルとしても嬉しくはあるけれど、なんだかさっきから「うちの馬鹿息子と違って隣の家のソフィーちゃんは勉強ができていい子ね～」みたいな比較をされている気がして、素直に喜べない。

（実際に小さい頃、剣術道場でそんなこと言われた気もするし）

むっとしているジルを見てか、アリスティアが皮肉るように「ふふん」と鼻を鳴らす。

「ま、とにかくあなたがお金を持って夜逃げしてなかっただけでもよしとしなきゃね。さ、準備しなさい。好きなもので勝負してあげるわよ？」

「はい？　勝負？」

「だから、逃げ出さず仕事していたご褒美よ。言ったでしょう？　実績を上げたら、その

たびごとに勝負してあげるって。今回はおまけだからね」

「あ！」

「さすがに装備を全部、ってわけにはいかないけど……。今回はそうね、勇者の兜を賭けて勝負してあげるわ」

そういえばそうだった。勇者装備を賭けた勝負をしてくれる約束だった。

まだ実績と呼べるほどの実績は上げていないものの、勝負してくれるというならその言葉に甘えないではいられようか。

（そっか、それなら……どれで勝負するかな）

先日はブラックジャックで大負けした。それから女王にもいろいろとレクチャーを受けて、他のゲームにも詳しくはなってきているけれど……。

（毎回、エッチなことしてるだけな気がするしな……）

二日に一回くらいはお忍びで顔を見せてくれる女王様だが、いつもギャンブルレクチャーはそっちのけになってしまう。特訓という意味では効果は疑問だ。

正直、強くなっている気がしない。

（となると……）

ジルには、以前から考えていたことがあった。

※

まだ軽く掃除しただけの薄暗いカジノホールへと場所を移し、ジルが向かったのは。
「へぇ、ルーレットがいいの？」
「はい。これなら強いも弱いもないでしょう！　純粋に運の勝負です！」
ルーレット台の前で、ジルは意気揚々と宣言した。
（ふふふ……ルーレットならば勝てる！　いや、これは絶対に負けられない戦いだ！　これで勝てないようならお先真っ暗だからな！）
カードゲームではジルはひよっこだ。ルールをおぼえることに精いっぱいで、勝つための定石を知らず、勝利に向けた確率計算もまだまだ怪しい。
だが、運勝負のルーレットならば話は別。しかもこの勝負、負けたところでジルはなにも失わない。だが王女は勇者装備を賭けているのだ。そういう意味でも、勝ち負けが運だけで平等に決まってしまうこの勝負は自分が有利。
「まあ、そうね。正しい選択と言えるわね」
「ふふふ……。ルールは単純にしましょう。好きな数字にひとつだけ賭けてルーレットを回す……。それを繰り返して先に当てた方が勝ちです」
「ふーん、いいわよ。それでいきましょ」
アリスティアもあっさりと承諾してくれた。妙に余裕があるのは気になるところだが。
（王女様にとっては勇者の兜を失うだけだから余裕ぶっているんだ。でも俺にとって兜は

偉大なる第一歩！　もうこうなったら兜だけゲットでもいいや！　兜だけピカピカの勇者様ってのもキャラが立ってるし！　よし、やる気出てきたあああ！）

0から36までのどのポケットに玉が入るかは運次第、ジルにとってもアリスティアにとっても五分の勝負だが、アリスティア相手にその勝率なら充分だ。もはや勝った気になっている。

「じゃあ、玉を入れるのは交代にしましょう。まず一回目、王女様がお先にどうぞ」

ジルが賭けたのは10。アリスティアは22に賭けた。

そしてジルがホイールを回す。アリスティアが玉を手に取り、投げ入れる……。

（ふふっ、さすがのアリスティア王女といえど、好きなポケットに玉を放り込むことなんてできまい！）

熟練のディーラーならそんなイカサマも可能……なんてのは素人の思い込みだ。実際に玉を放り込んでみればわかるが、ポケットにたやすく弾かれる軽い玉を思い通りに制御するなんてのは、魔法でも使わない限りあり得ない。そしてこのルーレット台には、魔法によるイカサマを防ぐための術があらかじめかけられている。

カン、カカカカッ……。

小気味よい音が鳴り響き、二人はじーっとそれが止まるのを待つ。

玉が入ったのは……11の番号。二人ともハズレだ。

（と、隣の番号とか！　惜しすぎる！　ま、まぁ、ちょっとホッとしたけど……）
数秒前に「玉の制御なんてムリ！」と自信満々に思っていたジルだが、実際はちょっと心配だったりした。意外に気が小さい。
「じゃあ次は『自信満々の勇者さん』の番ね」
「むっ！　なんだかトゲのある言い方を……次は当てますけどね！」
今度は30へ賭けた。アリスティアは23に。
今度はジルが玉を投げ入れ、カラカラカラ……と再び緊迫の一瞬。
「あら、15ね。またハズレ」
「ですね。サクサクいきましょう」
まあ、焦らずともそのうち当たるはずだ。そしてきっと自分が当たる。
そんな期待を含んだ予感を感じて、ジルは20の数字上へチップを置く。
「ふふーん、勇者様はキリのいい番号が好きなのかしら？」
「そう言う王女様だって、また22ですか？　同じ番号に賭けた方が出やすいとでも？」
バチバチと火花を散らして三度目の勝負。
カラカラカラ……カコン！　と気持ちのいい音が鳴ったのは5のポケット。
またハズレだ。
「じゃあわたしはもう一度23で」

「じゃあ俺は35で」
アリスティア王女はさっきから22と23の番号を交互にベットしている。おそらく、好きな数字なのだろう。
対する自分はここまでキリのいい番号に賭けていたが、
（末尾が5の数字が続いたので先読みして35にしとこう。そこそこキリもいいし）
という安直な考え。
どんな考えがあろうと勝負は五分と五分。それぞれの思惑を乗せて、ホイールが四度目の回転を始めた。
カラカラカラ……。だんだん長く感じられてくる玉の弾かれる音に耳を澄まし、高速で流れていくホイールの数字に目を凝らす……。
そして、ポケットに玉が落ちる運命の甲高い音がした。
「そ、んな……」
「わたしの勝ちね」
アリスティア王女がすうっと目を細める。
「……そうね、運勝負に持ち込んだのはわかるし、そういう点ではなかなかいい勝負だったけれど……勇者殿もまだまだよね～」
うふふふっ、と楽しげな笑い声を背に、ジルはがくりと崩れ落ちる。

「な、なぜだ……。根拠はないけど、なんとなく勝てるような予感がしてたのに！」
幸運の勇者と呼ばれた自分が、幸運を掴めずにこんな苦渋を何度も何度も……。
「だから甘いのよ。ほら、ここを見てごらんなさい」
「は？　なにを見ろって……」
王女が指差したのはルーレットのホイール。というか、さっきから王女が賭け続けていた23番のポケットだ。
「……ん？　んんん～？」
よく見ると、そこには汚れがついていた。建物が雨漏りでもしたのか、落ちた水滴が乾いたような跡があり、そこに埃がこびりついてしまっている。赤い色のポケットならそれなりに目立つ汚れだろうが、23は黒いポケット。気付かなかった。
「まさか……これに引っかかって？　それを狙って？」
「それだけじゃないわよ。玉の方も汚れてたもの。弾かれにくく、引っかかりやすくなってたのよ」
つまり、すべて計算尽くだったというのだろうか。
「でも、23だけじゃなくて22番にも賭けてたし……。ホイール上では離れてるのに……」
そうなのだ。ホイールに並んだ数字は連番ではなくバラバラ。だから22と23の位置もずいぶん離れているし、だからこそ「単に好きな数字なんだろう」と思ったのに。

「うふふー。そこが腕の見せ所よね。23番にばかり賭けていたら、あなただって不審に思うかもしれないでしょう？　だから好きな数字に賭けてるように演出したのよ」
「……はあぁぁぁ⁉　それってイカサマだよ！」
「失礼ね、そんなのイカサマのうちに入らないわよ。こういうことが起こらないように、ちゃんと台を整備しておくのもカジノ側の責任よ」
「くううぅ……」
確かにそうなのだろう。なにしろ、汚れがあったからといって23番に入るとは限らないのは最初の数回で実証済み。先にジルが当たる可能性だってあったのだ。
ジルが勝つ確率よりも、「23番ポケットに汚れがある」という情報を持つアリスティア王女が勝つ確率の方が、わずかに上回っていたというだけ。
彼女にだって負ける可能性はあったのに、そうならなかったのは、これはやはり経験と運、つまり実力の差としか言いようがない。
「次は、このカジノを開業できたら勝負してあげるわね」
どこか嬉しそうにそんなことを言い放って。
うなだれるジルを背に、アリスティア王女は颯爽と立ち去っていった。

※

「あら、それで負けちゃったの？　わたくしだったら、一回で当ててみせるのに」

「そんな強運があるの、女王様だけですよ……」
今日は夜のお忍びとなった恒例の逢瀬。書類とにらめっこしているジルの横にはラウラ女王が座っている。
が、その手はというと、相変わらずジルの股間へ。
「人集めは順調みたいですね。もうこんなに集まったのですか」
手元の紙を覗き込んで女王が尋ねてきた。
「あの、おちんちんをいじりながら、よくそんなふうに普通に会話できますね……？」
ペニスが引っぱりだされて、人差し指の腹で亀頭がいいこいいこされている。
くすぐったいような、ムズムズするような、もどかしい快感に邪魔されてしまって、こっちは考え事をするどころではないのに。
「んふ、それは年の功ですわね」
「そうですか……。まあ、とりあえず頭数は揃いそうなんです。でも、細かい仕事を任せられるだけの人はなかなかいなくて……うっ！」
きゅっと亀頭を手の平に包み込まれて、ぞくりとしてしまった。
「うぅん、そうですねぇ。確かに、そうすぐには見つからないでしょうけれど」
と言いながら女王様は服をはだけ始める。
最近お忍びで会う時によく目にするドレスをはだけ、豊満な乳房がむにゅりと溢れた。

「あ、あの……」
戸惑うジルの声を無視してソファーから床に降り、膝をついて……。
自分の乳房を捧げ持った彼女は、いまだにソファーに座ったままのジルの両足の間へ。ぴーんと天に向かって反り返ったペニスを、その柔肉で包み込む。
「うっ、わ……！　そ、そんなことしてくれなくてもっ！」
一国の女王を足元に跪かせて奉仕を受けるなんて、さすがに行き過ぎてる。
（とは思うのに気持ち、いいっ！）
人肌に包まれる心地よさ、むにゅっとひしゃげる肉の感触、上目遣いに反応を窺ってくる年上の女性の落ち着いた美貌……。
それに加えて不敬な行為に背徳感を感じてしまうからか、ペニスはギンギンに硬くなってしまっている。
「そうですね……わたしの方で口利きしてみましょう」
「え？　な、なにがですか？」
と呟いてから、さっきの話の続きだと理解した。スリスリと柔肉の擦れる感触でこっちは頭がいっぱいだというのに、まったく女王様には敵わない。
「元侍女には、そういった細かい仕事に長けている者が多いのです。結婚して王宮を下がった者達に声をかけて、しばらく手伝ってくれるように頼んでみましょう」

「え、そ、それは助かります……っうあ！」
深い谷間に挟み込まれた男性器が、押し寄せる圧迫感と期待感に震え上がる。
「でも、そうですね……。雑事のお手伝いならそれで済むでしょうが、侍女ですから、お金の管理まではできないかもしれません。元官吏で手伝ってくれそうな人は思い浮かびませんし、現役の役人に手伝わせるわけにもいきませんし……」
「そ、そうなんです。一番困ってるのがそこで……っ！　はぁ、はぁ……なににどれくらいお金がかかるか、それだけの収入が見込めるか、計算するだけでも仕事が膨大で……。そ、そういったことを安心して任せられる人がいればいいんですけど……くぅっ！」
ぎゅっと押しつけられた乳房に裏スジを擦られて、ジルが喘ぐように震える。
「んっ、どうです？　ジル殿、気持ちよいですか？」
今度はエッチに関しての問いかけだ。ねっとりした上目遣いが異様に色っぽい。
「は、はい。気持ち、いいです……！」
ずりゅっと滑る感覚と、コリコリとしたものに肉茎が擦られる感覚。女王が自分の乳房に手を添えて、両側から柔肉を巻き込むようにペニスを挟んだせいで、たまに擦れる乳首がぷにっと弾力感のある感触を混ぜてくる。
それが亀頭のへりや、裏スジの部分に当たってしまうたび、ぴくっと身体を跳ねさせずにはいられない。

しかもわずかに汗の湿りを帯びた乳房肉が、吸いつくような感覚を生み始めている。
「んふ……あっ、わたくしも、こうしていると……んんっ！」
捏ねるような彼女の手の動きが、次第に激しさを増していく。
「こうしてジル殿に喜んでもらえるのが、なんだか、んっ、こ、心地よいのです……っふ、はぁ、はぁ……。胸の中がチリチリして……っ」
密着感も増して、柔肉のうねりも増す。にゅるりとまとわりつく肉感に、じっとしていられない。ジルの腰にもジリジリと炙られるような感覚が募ってくる。
「んっ、はぁ……い、いいですよ。このまま出してしまってくださいね」
「でもそれだと……うっ！　か、顔や服に……」
ピクピクと震えて脈動を強くするペニスから射精の気配を感じたのだろうが、彼女の言うままに出してしまっては、その顔に精液が撒き散らされることになる。
（女王様、に……俺の精液を……）
想像して、その卑猥な光景に背筋が震えた。
「ジル殿はそんなこと気にせず……」
にゅるにゅると擦れる感覚が一段と早まる。一回擦られるたび、ペニスがざわりざわりと蠢く錯覚の痺れが走る。もう、そんなに長くは持たない。
（やばい、もう……出る……）

少しだけ腰が落とされ、きゅっと狭い入り口が亀頭に吸いつくような感触を感じた。
「っあ……はぁ、あぁぅ……」
指の先ほど入り込んだだけなのに、ソフィーは仰向けのジルの胸に片手を置いて不安定な身体を揺らし、もう一方は股間に添えたまま深呼吸を繰り返す。
（そ、そっか。初めてだから……！）
処女膜の存在を失念していたジルがようやく気付いて、痛みを和らげるために自分もなにかすべきなのかと迷いを見せた瞬間。
ぬぶっ、ぐぐぐぐっ……ぬぶんっ！
「っあぁぁ！　ジッ、ジルのぉ……はっ、入って、く……」
すでにペニスの先端は柔肉の海の中に沈んでいた。
「くあっ、き、キツ……」
ジルも思わず感想を漏らさずにはいられない。
女王様の内部とは違って、そこは非常に狭く感じられた。
ぬめりはあるのに締めつけが強い。ドロドロなのにぎゅっと狭まる。相反するような感触のあとにやってくるのは、腰の奥がゾクリとする強烈な快感だった。
ずるずると飲み込まれていくペニスが次第に姿を消し、やがて、二人の腰がぴたりとくっつく。接合部は熱いほどの熱気に包まれた。

同時に、くたっと倒れ込んだソフィーが抱きついてくる。
「はぁ、はぁ……、私ずっとこうしたかった……初めてがジルで、よかった……」
耳元に囁かれ、ぞくりとする言葉だった。
「ねえ、私の中は……き、気持ちいい……？」
「うっ、うん……。ソフィーの中、ヌルヌルなのにすっごく狭い……！」
彼女がはぁはぁと繰り返す吐息には、甘い香りが感じられた。
「そ、そう……。それなら、よかった」
安心したように呟いた彼女が再び身体を起こし、緩やかに腰を持ち上げていく。
ヌルヌルした肉壁にペニスが引きずられるような感覚に目を細めると、頭上のソフィーもなんだか小刻みに息を漏らしている。
「ソフィー？　もし……」
「いっ、痛くなんてないから……っ、んんん……！」
先回りして否定されたが、強がりだろう。
（ソフィーは頑固なところがあるからな……。嬉しいけど……）
いつもは手のかかる相棒だけれど、こうしてみるとそんな頑なさも可愛らしい。
（って、いつも手がかかるのは俺の方か……）
いつだってソフィーは自分のために尽くしてくれた。それが彼女の愛情表現なのだと、

ジルは今頃になって気付く。
となると、目の前の少女が愛おしくてしょうがなくなった。
「無理しなくていいからな……？」
そう言っておいてから、ジルも下から手を伸ばして彼女の身体を支えてやる。
（と見せかけて、おっぱいをいじるためでもあったり……）
むにっ、とひしゃげる心地よさがクセになりそうで、ペニスも疼いてしまう。
イタズラ心も働いて、勇者様はわざとレオタードの胸部分に指を引っかけ、それをずるりと引きずり下ろした。
斜めに下ろされた生地からは溢れ出るように乳肉が溢れ出す。片方だけさらけ出された乳房というのは、妙にいやらしく感じられた。
「あっ、んんんぅ！　こ、こらぁ……！」
緩やかにペニスの抽送を始めていたソフィーはビクッと身体を震わせるも、ジルが自分の胸に熱い視線を注いでいるのを感じてそれ以上言えない。
「ソフィーってすごくスタイルがいいと思ってたけど……胸はしっかり大きいよね……」
ぷるんと張りつめた乳房はラウラ女王に比べれば小さめだが、平均から考えたらかなり大きい方だろう。そして一番違うのはその張りと形。
どこまでも柔らかいラウラ女王に顔を埋めるのもいいけれど、こんなふうにプルプルし

て活きのよさそうな乳房も捨てがたい。
形は理想型とも言える綺麗なお椀型だし、そこに指を当てていやらしくひしゃげさせるのは、男としてはたまらない。
「はぅ！　んあぁぁ……っ、しゅ、集中できなく、なるから……っ、そんなにっ……」
ゆっくりと腰を持ち上げて、ゆっくりと下ろして。自分を慣れさせるようにその動作を繰り返していたソフィーが、ポニーテールをフルフル揺らして動きを止める。
「そっか……わかった」
なんて頷きながらもジルは手を止めない。
ピンクに色づく乳首は蕾を思わせるのに、わずかな力で挟んだだけでムクムクと立ち上がる。そこを二本の指で挟んで、クリクリクリっと。
「ふぁ！　っんやぁぁっ！　ひゃ、うぅんっ！」
断片的に、悲鳴のように鋭い喘ぎが響いた。やっぱり胸が弱いらしい。
だったらもっと感じさせてやるべきだろう。その方が痛みは紛れるはずだ。
「っ！　うぅぅ……！　ジ、ジルってば、んはんっ！」
涙目で責める目つきのソフィーだけれど、今は全然怖くない。拗ねているというか、甘えているようにしか感じられない。
下乳から指でなぞり上げ、掬い上げて軽くしごくように。にゅっと伸び上がった乳首を

押さえ込んで弾くように何度も擦り上げる。
「っん！　っは、はぁ、はぁ……！」
目を細めて切なげな声を矢継ぎ早に漏らすたび、さっきまでは緩やかだった腰の動きまでがスピードを上げていく。
くちゅっ、ぷちゅ、にちち……にゅるっ、ぬぷぷ！
「うあっ！　ソ、ソフィー？　そ、そんなに動かしたら」
「ジルがっ、胸ばかり触ってるからっ、あんんっ！　やっ、乳首、そんなに引っぱらないで……っ！　っふぁぁ！」
動いた拍子にぎゅっとひねってしまった乳首が、ソフィーはむしろ気持ちよさそう。
そしてジルは、ただでさえきつい肉壁の中ではゆっくり動かすくらいが心地よかったのに、急に動きが激しくなったせいで一気に追い詰められてしまう。
（くぉっ……！　吸い上げられる……うううっ！）
気持ちよさのレベルが急上昇し、これではあっという間に絞り出されそう。
（そ、それはそれで、ううっ！　いいんだけどっ……！　くっ！）
初めてのソフィーに気を遣ってみせたい自分としては、自分だけ気持ちよくなっているようで引け目がある。ここはなんとか時間を稼ぎ、ソフィーにもうちょっと感じてほしいところだが。

「んあっ！　ジッ、ジルうぅ……！　ふぁぁ、はぁ、はぁ、あうぅんっ！」
激しく喘ぐ彼女は倒れそうなほどの前傾で、跨がるジルに乳房を差し出してきた。
（うっ、こ、これって、もしかして、ものすごく感じてる？）
誘われるように乳房を口に含むと、「ひゃうっ！」と甲高い声。そして。
「ソ、ソフィー、く、うあっ！　これ、締まるっ……！」
連動して膣穴がうねり、ますます吸いついてきた。
ゾクン！　と背筋が震え、こらえられなくなる。
「ご、ごめ、俺も、動きたい……っ！」
一方的に腰を振られるだけでは我慢できず、ジルは彼女の動きに合わせて腰を跳ねさせる。ぐちゅっ！　と卑猥な水音が響いた瞬間、それまでとわずかに違う摩擦の刺激がペニスに走って、ますます腰が止まらなくなる。
にゅぶぶっ！　ぶちゅっ！　ぶちゅちゅっ！
斜めに突き込まれた肉棒が密着してくるぬめり肉との間にイヤラシイ音を立てさせ、
「ひっ！　あんんっ！　やぁっ、これ、っは、うぅぅんっ！　あぁう、いっ、きもち、いい……っ！　はぁ、ジルぅ、ジルぅ……っ！」
戸惑うような美少女の声が甘く蕩け始める。
「っはぁ、あく……擦れてっ……ジルのが擦れてきもちいっ、ひんっ！　は、恥ずかしい

のにぃ……！　声、とまんないっ……！」

甲高い声が連続的に響き、ソフィーはますます身体を倒して抱きついてきた。

「あぅぅ……ジル、好きっ！　ずっとっ、好きで……ひゃんんっ！　ずっとこうしたくて……っあああっ！　っはぁ、はぁ！」

胸板に乳房が潰れ、息が届く距離で視線が交錯する。仰向けのジルと覆い被さるソフィーで二人して抱きあう格好なのに、腰だけがいやらしく上下に跳ねていた。

「お、俺もっ、ソフィーのこと……っ！」

ぎゅうっと抱きしめてソフィーの存在と快感を噛み締める。

「ジルぅ……むうぅ……んむ……はぅ、ちゅ、ちゅぱっ……」

どちらからともなく舌を伸ばし、相手の舌に触れさせていた。ほんの少しの接触にも、胸の奥がざわりと歓喜のさざ波を立てる。夢中で唇を重ねた。

（あぁ、そういえば俺、キスするのは初めてだった……）

初めてなのに、こんなにいやらしいキスをしている。

舌と舌がうねり、触れあった唇を舐め上げ、舐め上げられる。そのたびに胸の奥がゾクゾクして、さらなる一体感を求めてしまう。

ジルは彼女の腰を持ち上げるようにして奥深くまでを貫く。

にゅぶぶぶっ！

柔らかい胸がくっついてくる感触……。普段のコルセットドレスではわかりづらい、隠された膨らみがひしゃげて。こちらの胸板に、ふにっと接触。

そしてアリスティアは、さらなる上目遣いからのひと言。

「べ、別に……責任取れなんて言わないから……」

「うううっ……！」

そこまでの誘惑を受けて、我慢し続けられる男がいるだろうか。

（いるかそんなヤツ！）

ジルの中で、理性の糸がプツンと切れる音を立てた。

太腿に腰掛けるアリスティアの肩をがしっと掴む。そのままこちらを向かせ、ベッドに押し倒した。

「ひゃっ⁉　ジ、ジル……んんっ！」

上半身だけベッドに乗せて寝そべった格好のアリスティア。足はそのまま床に投げ出されて、ドレスのスカートからは真っ白な太腿が伸びていた。

そこに手を置き、すうっと撫で上げる。

「っひゃ……ん！」

くすぐったそうに目を細めるアリスティアの肌はとんでもなくなめらか。撫でる手の平に感じる柔らかさには、上質の陶磁器にも通じる上品さがある。

ドレスはどう脱がせたらいいのかわからない。伸ばした手で肩紐をずらし、胸元を掻き開くように手を動かす。
「あっ、う……！　ジルぅ……」
すでに紐を緩められていたドレスはほどけるように左右にはだけられ、そこから、ふっくらした白い丘陵が顔を出した。下着はつけていないようだ。
小さめながらにしっかりと盛り上がった柔肉の丘は、仰向けでもまったく形が崩れない。ふるるっと揺れる弾力と柔らかさの頂点には薄いピンクの乳首が佇んでいて、それが儚げに見えてしまうほど可愛らしかった。
「は、恥ずかしい、んだけど……」
「でも、アリスティアの胸ってなんだか芸術品みたいだ」
じーっと見つめているだけで満足できてしまいそうな光景に、しかし下半身がずくんずくんと疼いている。ジルはもう、その疼きに逆らう気はない。
前屈みに覆い被さって、その乳首の蕾に吸いついた。
「ふっ、う……！　やっ、ん……」
ちゅぱっ、ちゅ、ぴちゃ……。
犬か猫のようにペロペロと舐めまくられ、アリスティアは切なげに震えていた。
まだ柔らかい乳首は、ペロッと舐めればふにゃりと倒れて、唇に甘噛みすればぷにっと

潰れる。乱暴にしたら壊れてしまいそう。

「くすぐったいっ、んんっ……。でもこれ、なにか変……っう！　はぁはぁ、うぅん！」

その蕾が喘ぐ声に比例してじわじわ変化する。どんどんしこりを持ったものになって、舐め上げるたびにプルンと弾かれ、乳房も一緒にいやらしく揺れてしまう。

（ああ……アリスティアってこんなにすべすべの肌してたんだ……）

今まで触れたことすらなかった肌は想像以上になめらかで、舌を這わせるのが心地よく感じるほど。

少し舌先を動かすだけでピクピク悶える王女様も、なんだか瞳がうっとりしていく。

ジルはそのまま身体をずらし、おへそのあたりを過ぎたあたりで太腿を押さえ込む。

「さっき舐めてもらっちゃったし……お返しだ」

「えっ……？　っん！　そ、そこも、舐めるの……？」

少しだけ怯えたふうなアリスティアは、恥ずかしいのだろうか。

でも容赦しない。ジルはしゃがみ込んで彼女の太腿を肩に乗せると、そのまま顔を寄せていく。アリスティアは上半身だけベッドに乗っている状態なので、こうすると彼女の恥ずかしい場所はもはやジルの眼前だ。

ふわふわしたスカート部分をめくり、その中を覗き込む。

さすがにこちらは下着をつけていたけれど、白くて上品なそれはすでに中を透かしてし

まっている。薄すぎるくらいの高級生地も考え物だ。
「アリスティア、濡らしちゃってる？　そっか、いくら王女様でもそうなっちゃうんだ」
「ななっ、なに言っちゃってるの⁉　そ、そりゃわたしだって女の子なんだから、っ、ひゃ！　あぅ……そ、そんなに……」
言葉の途中ですでにジルは顔をくっつけ、舌先を突き出していた。
ぺとり、とショーツの股布にくっついた舌先によって、ほわっと漂うアリスティアの女の子らしい匂いと、意外なほどに熱くなっている柔らかさが伝わってくる。
（なんだかいやらしいな、これ……）
うっすら透けて見える秘裂はまだ閉じているようだけれど、左右にふっくらと盛り上がる大陰唇はハッキリと見えてしまっている。
ちゅっ、ぢゅる……ぷちゅ！　ぴちゃ、ぴちゃ……。
ショーツの上から何度も何度も、割れ目を広げるように。たまにわざと狙いを逸らして、陰核や秘裂のへこみのあたりをベロッと舐め上げてみた。
「ふううっ……！　んんぅ……、はぁ、はぁ……」
そのたびにアリスティアは両手で口を押さえ、ぷるるっと太腿を震わせる。あっという間にショーツに染みこむ唾液と愛液との判別はつかなくなってしまった。
「はぅ、ううっ！　ジルぅ、んっ！　そ、そこ……」

「ん？　もっとしてほしい？」
さすが強引に迫るほどの性格だけあって、いったん始めてしまえばその要求もストレート。むしろジルはそれが嬉しくて、ナマで舐めるためにショーツを脱がすことにした。
ねちょっと音を立て、細い糸を引いて、熱を持った下腹部から下着が離れる。下着から足先を抜くと、もう、邪魔なものはなにひとつない。
透き通る白さを感じさせる肌の上に、髪と同じ色の薄い茂み。
んちゅ……くちっ。
舌を伸ばして割れ目を左右にこじ開けるようにすると、まるで蕾が花咲くように、その奥までがクパッと開いた。
（ヒダが小さいから、なんだかここまで可愛らしく見えるなぁ……）
小陰唇はぷっくり充血しているけれど、元が小さくてなんだか肉厚の花びらのよう。舌でつつっと撫でるとぷるっと震えて、まるで触って欲しがっているように感じられた。
「あふっ、ジル……ぅ！」
指先でヒダを押さえ込み、さらに開く。肩の上に乗せた太腿がきゅっと狭まり、すがりつくように頭を挟んできた。
小さくて敏感な肉豆がジルから隠れるように隠れている。そこに舌をぴとっと触れさせると、アリスティアの吐息が一気に弾む。

ちゅ……ぴちゃっ！　ちゅぷ、ぴちゃぴちゃっ！

「はぅぅぅんんっ！　そっ、こ……ぉ……。気持ちいいよぉ……！　っく、はぁ、ああぅ……！　ジルぅ！　これっ、こんなの、んんっ！」

チロチロと舌を跳ねさせ陰核を集中的に責める。見るからに性感の度を増したアリスティアが右に左に身体を揺らし、足でぎゅっと締めつけてきた。

「気持ちよかったら、イッちゃっていいからね」

さっきは自分もあっさり達してしまったので、その意趣返し、と思ったのだけれど。

「イ、イク……？　って、ひぁあんっ！　き、気持ちいいってこと……？」

喘ぎ混じりに呟いた言葉からすると、聞いたことのない言葉だったようだ。いや、王女様であるアリスティアのことだから……。

（もしかしたら、イッたこともないのかもしれない）

そんな気がした。

そうなると、ますますイカせてしまいたい。舌だけで女性をイカせるというのは初めてで、ちょっと自信がないけれど。

ぢゅぱっ！　ちゅ、ぴちゃぴちゃっ、ちゅぷっ、ぷちゅっ！

「ふぁぁぁっ!?　はげ、し……んんんっ！　はぁ、はぁ、ううぅん！　ジル、それっ、だめぇ……！　おか、ひぃうっ！　おかしくなっちゃっ……ううぅ！」

喘ぎに必死で呂律が回らなくなっているアリスティア王女というのは、なかなか背徳感をくすぐってくれる。

ジルも下半身をギンギンにしながら、夢中で秘裂に吸いついた。

蜜があとからあとから溢れる割れ目に舌を潜らせ、ほじるようにそのまま動かす。

かすかに開いた膣口がヒクッと震え、陰核に触れた時には王女が全身で跳ねて……。

「はぅぅ、っはぁ、はぁ、くふっ！　きっ、気持ちよすぎてっ……ひっ！　なにこれぇ、んんっ！　はぁはぁ、なにかっ、く、来る……ぅ！」

途切れ途切れに訴える王女様は、明らかに絶頂に近づいている。

ジルはトドメの一撃として、唇で覆うようにクリトリスへ吸いついた。そのまま嬲るように擦り、唇をぴとっとくっつけて――敏感な部分を丸ごと吸い上げる。

ちゅううううっ！

「ひゃぁぁぁぁぁっ⁉」

ぐいん、と背筋を波打たせて、アリスティアが背を反らしていく。肩に乗った足の先もそれに合わせてピンと伸び……爪先がぶるっと震えた。

「あ、っあ！　だめぇ、なんだか、へんっ、あっ、あっ、あああぁぁっ！　ひゃ、んんんっ！　ふぅ、ふぁぁっ！　ひゃぅぅぅぅぅんんっ‼」

王女は絶頂に達して――一瞬の間を置いて、反らしていた背中を落とす。ぼふん、とベ

ッドに沈んだ王女の瞳は潤んで、今にも泣きそうな感じ。
だが、その陶然とした表情にはもちろん悲しみはない。むしろ幸せそうに息を荒らげ、天井を見つめている。
「あうぅ……」
感度のよさを表すように、初めての絶頂を迎えた股間からぴゅるっぴゅるっと潮が吹いている。それを浴びながら、ジルはゆっくりと立ち上がった。
「アリスティア……大丈夫？」
「ん……わ、わたし、すごく気持ちよくて……んんっ！　だ、大丈夫……」
喘ぐ混じりに応えて、そっと視線を動かす。
「うん、いいわよ……ジルの好きにして……？」
股間にそそり立つペニスを見て、ジルが求めているものを感じたのだろう。
今にも弾けそうなほど血管を浮かせた肉棒が、自分の中に入りたがっているのだということを察してくれた。
（やっぱり、可愛い……）
最初はアリスティアの方から誘って始まったこの行為だけれど、今ではジルの方がそれを求め、もう止められなくなっていた。
どくんどくんと震える胸に甘酸っぱい感情を抱き、愛しさを感じてしまうこの少女と繋

がりたいという欲望を抑えられない。
アリスティアの投げ出された足を、今度は脇に抱え込む。わずかに持ち上げられた股間からは濡れそぼった蜜壷が垣間見え、狙いを定めるのに苦労はなかった。
ぴと……熱く火照った器官同士がくっつきあとは少し力を入れるだけ。
「ん……ジル、わたしね……嬉しい……」
さっきから潤んでいた瞳だが、今はそこにうっすら涙の雫を浮かべている。それがいじらしくて、ペニスがビキン！　と跳ね上がった。
ずっ……。
それをなだめすかして狙いをつけ、膣口に押しつけた亀頭をゆっくり勧めていく。
ずずっ……、くちぃっ、ぷちゅ！
愛液が押されて弾ける音が続き、そして――。
「あっ、入ってくる、入って……くっ、うぅぅんんっ！」
ぷちり、と純血の証を破ってペニスが侵入した。
（アリスティアの中って、熱い……！）
絶頂まで至った事前の愛撫のおかげで、締めつけは強くても動けなくなるほどではない。ただ、ヌルヌルの粘液をまとってぴったりと貼りついてくる膣粘膜にビックリするほどの熱を伝えられ、思わず喘いでしまう。

「ふっ、うぅぅ……ジルぅ……んっ」
必死に口を押さえて、今度は痛みの悲鳴を押さえているのだろう。アリスティアはわずかにジルの名を呼びながら、きゅっと身を縮こまらせて奥への到着を待つ。
ぬるぷぷぷ……ずっ、ずず……ぐりっ。
「っ！　あぁぁ……わたしの中、ジルのでいっぱいになって……ひゃぅっ！」
亀頭が最奥に到着した途端、王女様はか細い叫びを上げた。
ぴくぴくぴくっと膣全体が蠢き、肉棒をぐるりと取り囲んだ肉壁にしごかれているような感覚がある。
「ふぅ、ふぅ……だ、大丈夫だから、このまま……んあんっ、う、動いて？　わたしの中で、ジルのをもっと感じたい……」
「うん……。俺もアリスティアの中に出したいしね。このまま最後までいっちゃうけど……いいよね？」
こくりと頷くアリスティア王女に、ジルは胸を疼かせながら腰を引いていく。
ぬぶぷっ、と引きずり出されたペニスは愛液まみれだ。外に出るとひんやり冷えて内部の温かさを余計に際立たせる。
それを再び挿入すると、さっきより柔軟になった気がする膣肉の連なりが襲ってきた。
（もう慣れてきてる……？　さっきよりまとわりついてくる……ううっ！）

膣特有のざらっとした感触に亀頭を撫でられて、腰の奥がぶるるっと疼いてしまう。
それを誤魔化そうと腰を押し出すが、ますますうねりを増す膣肉が絡みついてきて、ジルはさっそく歯を食いしばらないといけなくなってしまった。
「アリスティアの中、ものすごく気持ちいい……。なんだか、ざらざらが強くて絡みついてくるよ……！」
「んはぁぁっ……！　なによ、もう……んんっ！　バ、バカにしてるの……っんん！」
「そうじゃなくて、褒めてるんだけど……」
褒め言葉なのかバカにされているかも判断できないくらいウブな王女様に苦笑いしながら、ジルは前傾して唇を重ねる。
「あっん……ふぁむ、ふっ……んん、ジルぅ……」
あっという間に瞳を蕩かし、王女様は機嫌を直してくれた。
「あっ、このままがいい……。キスしながら、して……」
「はいはい、王女様のおっしゃる通りに」
王女様扱いにも、今回は構っていられなかったらしい。アリスティアは夢中になって唇を突き出し、舌を伸ばし、ジルの唇に擦りつけてくる。
ジルも夢中になってアリスティアを貪った。
舌を激しくうねらせ、でたらめに押し出して彼女の口腔をかき回す。涎がダラダラ零れ

るほどに激しいキスをしていると、一体感がどんどん高まって……。
「はぅ、む……、んんっ！　ふぁ……なんらか、ん……っ、すごく……」
アリスティアが言いたいことはジルには理解できた。
抽送を続けながらのキスは相手の息遣いが感じられる。ジルは彼女の呼吸に合わせて腰を動かし、グリグリと膣奥をいじめていた。
「ひゃうっ、む……ふぁぁ！　ジル、いいっ、それぇっ……好き……ぃ！」
「そっか、んじゃ……」
ぬるるっと引いてもう一度奥まで。子宮口とおぼしきあたりをグリグリと突き上げる。
きゅんっ！　と膣肉が締めつけてきた。「ふぁっ！」と短く叫んだアリスティアは目を細め、キスをほどいた唇を艶やかに揺らす。
「ふあぁぁ……っく、いいよぉ……ジルの、すごく感じられて……んんっ！　はぅ、ぅんん！　っは、はぁ、はぁ、気持ちよくなっちゃう……！」
「アリスティア……っ」
リズムよくぎゅっ、ぎゅっと締めつけられる間隔がどんどん狭まってきて、ジルにも彼女が感じていることがよくわかる。自分の精液を欲しがっているからだ、そんなふうに感じられて、ジルもますます昂ぶってきた。
「ね、ねぇ……わたし、また……ふぁんっ！　らめぇ……そこっ、感じちゃ、んんあっ！

ひぅっ、うぅ……感じちゃうよぉ……！」

もしかしたら、またイキそうになっているのかもしれない。

ジルは細かく抽送を繰り返しながらスピードを上げ、自分のリミッターも外す。

あとはひたすら突き上げて、射精まで一直線だ。

「わかった。出すからな……！　アリスティアの奥に、さっきのをいっぱいっ……！」

「うんっ！　奥にっ！　中に出してぇっ……！　はぅっ！　っはぁ、はぁ……わたしの中、いっぱいにしてぇ……!!」

ジルは抱えた太腿をさらに引き寄せた。

それまでより深くに亀頭が届き、抽送の速度も上がる。かき回される膣内からは次々に愛液が溢れ、ぶちゅ、ぶちゅちゅっ！　と卑猥な水音が止まらない。そこらじゅうに二人の体液の混合液を撒き散らしながら、さらに強く、さらに深くを抉っていく。

「ひあっ！　あぅぅ、はっ、はっ、んんっ！　ジルぅ！　ジルぅぅ！　わたしっ、イッ、イキそう……！　さっきの、またくるぅぅっ！」

王女の腰が持ち上がり、秘裂を捧げたような格好に。より深い一体感を求めて二人はキスを繰り返しながら、その瞬間に向かって一気に駆け上がっていく。

「くっ、アリスティア……っ！」

叫んだジルが膝をベッドの上に乗り上げ、王女にのしかかるような体勢でこれまでにな

い深い突き込み。
「あっ、ひあぁぁぁんんっ！」
額に汗を浮かべたアリスティアもいっぱいに目を見開いてそれを受け止め、抱えられた足をジルの腰に巻きつける。
腰と腰がくっつくほどに深い挿入に膣肉が喜び、幾重ものザラザラが一斉に蠢いた。
「いっ、あああああっ！　ジルっ、わたしっ、んんっ！　あああぁ、イクっ、イク……」
埋め込まれたペニスが肉壁の群れにぞろりと舐め上げられ、絞られ、揉み込まれて。ぐっと歯を食いしばっていたジルが大きく息を吸って、そのまま……。
どぷぷぷっ！　どぴゅどぴゅ、どぶぶぶっ、どくどくどくっ！
ねっとりと濃い、大量の精液が、あっという間に膣内を満たす。
「ひっ、あ……！　こ、これっ、ジルのっ、わたし、っあ、あああぁぁぁっ！」
身体の奥に射精の勢いを感じたアリスティアが、歓喜に細めた瞳から一筋の涙を流し。射精途中にあるペニスが、ますますぎゅっと締めつけられたと思った瞬間――。
「ひっ！　あ、あぁぁ……イク、っううううううぅぅぅぅっ……!!」
より深く、幸せな絶頂に至ったアリスティアの嬌声が、部屋の中に響き渡った。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一!エロラノベ&エロコミック満載!!

二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!

コミック UNREAL アンリアル

メガミクライシス
MEGAMI CRISIS

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて!
キルタイム 検索 Click

書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。